方言語彙の個人性と社会性

－安芸方言２地点の数量副詞にみる－

岩　城　裕　之

1　はじめに

方言語彙に個人差が大きいことはこれまで盛んに指摘されてきた（室山1976　柴田1988　野林1996など）。しかし、具体的にどの程度の個人差がみられるのか、あるいは、体系上のどのような語に個人差がみられるものなのかといったことについての報告は未だほとんどなされていない。本論では安芸方言2地点の数量副詞語彙にみられる個人差の実態を報告し、その体系のいかなる部分に個人差が現れがちなのかを考えるものである。

しかし、その際、個人差を「差」の部分にのみ注目して捉えるのではなく、社会的に共通する部分とそうでない部分という相対的な捉え方をする。社会的に共通度の高い部分を「社会性」の高い部分と呼び、共通度の低い部分を「個人性」の高い部分と呼ぶ。本研究の最終的な目的は個人の差を明らかにすることだけではなく、言語社会において個人の言語がどのような姿で存在しているのかということであるため、このような捉え方をすることになる。

2　研究の方法と調査の実態

個人差の実相を体系上において厳密に捉えるために次のような方法をとる。

Ⅰ　まず個人差の考察の対象としない話者をも含めて、年層も広くとり多くの教示者に会い、語の意味を説明していただく。使用文も幅広く得る。

Ⅱ　先に得られたすべての情報を基に、各々の語を体系づけるための分類枠を仮設する。この時の分類枠は、調査地点に存在している最大数の分類枠を得るようにする。なお、分類枠は個人差を含んだ形で設定する。

Ⅲ　先に得られた分類枠を利用して、その相互関係を考えて体系を構築する。なお、ここでの体系は個人差を含んだまま描くものである。したがって、個人性と社会性の説明モデルとしても使用できるものである。[1]

Ⅳ　同時に、先に得られた分類枠の所有の有無について、個人別に質問簿を用いた質問調査を行う。Ⅰの調査を第1次調査、Ⅳの調査を第2次調査とする。

また、調査地点は広島県豊田郡豊町大長（ヒロシマケン　トヨタグン　ユタカマチ　オーチョー）[2]および、同県山県郡加計町加計（ヤマガタグン　カケチョー　カケ）[3]である。調査は、1996年から1997年の2年間に行った。教示者は個人差を見る第2次調査の場合、土地生え抜き、70～75歳、農業従事者とい

う条件の下で、男女各5名ずつを得た。また、数量副詞は基本的に具体物の数量の程度を表すもので、割合を表すものは含まないと規定する。したがって、「全部」などの割合を示している語は含まない。〈多〉〈適当〉〈少〉の3カテゴリーが数量副詞の下位カテゴリーである。なお、数量副詞を対象とした場合、直接的に生業などの外部状況に関わらず、考慮すべき要素が少なくて済むという利点がある。また、副詞の中でも体系性が比較的明確で、先学の調査研究による資料の蓄積があることも[1]数量副詞を取り上げた理由の一である。

3　分類枠の設定と体系化

まず、数量副詞全体は次のように分類される。

この違いは次の文によって確かめられる。

文1　＊＊ではないけれど少しならある。

文2　もう＊＊しかない。

数量副詞 ┬ 数量〈多〉
　　├ 数量〈適当〉＊
　　└ 数量〈少〉

＊今回の考察には含まない。

文1によって、これを満たすものが数量〈多〉に属することが確認でき、文2によってこれを満たすものが数量〈少〉に属することを確認する。しかし、「シコタマ」などの一部の副詞は、言いかえが可能である他の語との関係において所属カテゴリーを設定する。次に、先に分類したものの下位の分類枠を設定する。設定にあたっては、具体的に得てきた文例や教示文を利用して分類枠を設定する。

○コー ┌ヒ┐ーナラ　ナンボデモ　アリ ┌マ┐スカラ。(コーヒーならいくらでもありますから。)

○エンリョ ┌セ┐ズニ　┌エッ┐ト　タ ┌ベナサ┐イ　┌ヨ┐。ナンボデモ　┌ア┐ルンジャケー。(遠慮しないでたくさん食べなさいよ。いくらでもあるのだから。)

○ト ┌シ┐トッテ　┌インタイシタ┐ケー　ジ ┌カンワ　ナンボデモ　ア┐ル。(年をとって引退したから時間はいくらでもある。)

上の発話にみられるように、「ナンボデモ」は限界性を感じさせない多量をあらわしている。気にしなくてもよい、限界はないから、といった意味であろう。

しかし、限界性を感じさせない、ということがあてはまらない下のような場合はどうであろうか。

＊○センタクモノガ　ナンボデモ　ホシテアル。

目の前にあり、状態を描写しているような場合には非文となる。

●キ ┌リ┐ガ　┌ナ┐イン　ヨネー、ナンボ ┌デ┐モワ。(限りがないのよね、「ナンボデモ」は。)

したがって、新たに次のような分類枠が設定できる。

【分類枠1】数量の限界性を前提としない

次に、限界性を前提とする語についてさらに見てゆくと、「エット」などの語と「バクダイ」のような語はどの程度の数量を表すかという点において違いがあり、互いに排他的関係になっていることがわかる。

以下は「バクダイ」という語についての教示である。

●モノオ　オー ┌キ┐ク　ユー。(ものごとを大袈裟に言う。)

あるいは、「ギョーサン」について次のような教示もある。

●ソ ┌レ　イ┐ジョー　ユー　カンジ。┌エッ┐ト ┌エッ┐ト。┌エッ┐ト　ユー　コト ┌バ┐カ

ラ　┌ハ┐ミデタ　カンジ。(それ以上というかんじ。「エットエット」。「エット」ということばからはみ出た感じ。)

ここから、これらの語は数量〈多〉のなかでもより多量を表していることがわかる。すなわち、「人が××いる」という場合に、どの程度の人がいるかという受け取り方が異なっている可能性がある。数量の〈多〉、〈より多〉を説明する場合、これらの教示者は「エット」を基準としている。「エット」という語が頻繁に使われ、教示文の中に多く出現することなどから、これを「中核語」とよぶことにする。この中核語を基準に、これより多いか、あるいは同じ量か、という2段階で「多いこと」の程度を認識していると考えられるのである。しかし、これ以上細かいレベルでの量の違いを説明できる教示者はいなかった。先の「限界性を前提とするか否か」という事柄については具体的に発話文という形で検証ができたが、ここではそれは不可能である。

【分類枠2】「エット」より多量を表す

以下は「ドッサリ」という語についてである。

○┌マ┐エニャー　ドッ┌サ┐リ　┌ト┐レヨッタ　デ。(以前はたくさんとれていたよ。)

柑橘農家で蜜柑の収穫についての話題で出てきた発話である。この「ドッサリ」という語に関しては、筆者との間で次のようなやりとりがあった。

●筆者：ミ┌ズガ┐　ドッ┌サ┐リ　タマル　ユーノワ　オ┌カシ┐ーデス　┌カ┐。

(水が「ドッサリ」貯まるというのはおかしいですか。)

↓

話者：オカ┌シ┐ー　┌ノ┐ー。ユ┌ワン┐。(おかしいなあ、言わない。)

↓

筆者：┌ビ┐ールオ　ドッ┌サ┐リ　┌ノ┐ンダ　ユーノワ。(ビールを「ドッサリ」飲んだと言うのは。)

↓

話者：ソ┌レ┐モ　ユワン。(それも言わない。)

この語は、液体や人については使えないという語である。したがって、対象物が何になるかということ（何の数量を表すかということ）に制限がある。同様に対象物に制限がある語には「タップリ」がある。

○ |自治会の打ち上げの席で幹事が| サ┌ケワ┐　タッ┌プ┐リ　ヨーイシテマスカラ。(酒はたくさん用意していますから。)

人や猫が「タップリ」いる、といった使い方は不自然である。主に液体について使われるようである。しかし、中には「車がタップリ走っている。」という使い方ができるという教示者もあった。

次に、「ヤマホド」である。まず語の構造を見たとき、「ホド」という形態素に注目できる。この「ホド」は比況の助詞である。したがって、「ヤマホド」は数量が多いことを「山のように」と比況的に表現している。そこから、具体性ということが出てこよう。従って、下のような文を聞くことはできなかった。

*○ミズガ　ヤマホド　タマッタ。

聞かれた発話は次のようなものであった。

○ ┌イ┐マワ　アレ┌ホ┐ーダイジャケド　ムカ┌シャ┐ー　┌エッ┐ト　ツ┌ク┐リョーッテヤ┌マ┐ホド　トレトッタン　ヨ。(今は｛畑が｝あれ放題だけれど、昔はたくさん作っていて、山ほど取れていたのよ。)

ここでは作物の量を「ヤマホド」と言っている。積み上げることができる物、の量と考えられるが、これも教示者の中には「人がヤマホドいる。」「このへんには猫がヤマホドいる。」という場合に使用できるとした教示者もおり、この場合、液体物には使えないという制限となる。そして、このような制限がある語と、制限のない語との間には、包括・被包括の関係が成り立っている。

同様に、被修飾部に制限がある語もみられる。例えば「タラフク」である。

● ┌ギョ┐ーサン　タベタ　ユー　コト。(たくさん食べたと言うこと。)

●ソ┌リャー　┌ヨ┐ーケ　┌タ┐ベタ　ユー　コ┌ト┐　ヨ。(それはたくさん食べたということよ。)

● ┌タ┐ベタンニシカ　ツカワン　┌ネ┐ー。(食べたのにしか使わないね。)

「タラフク」という語は「食べる」文脈において使う。被修飾部に制限がある語である。「シコタマ」についても、何かを手に入れる、それを貯蓄するという文脈において使われる。

これら「対象物や被修飾部の制限がある」ということは、より具体的場面において使われるということを意味する。前者は何に対して使うかということであり、後者はどういった場面（待遇性という意味ではない）で使うかということを意味する。語が具象性を持っているということである。逆に言えば、語が具象性を持っているがために、対象物と被修飾部という2つの軸において制限があるということである。

さらにこれらの内部は、対象物制限については分類枠「物について使う」「液体について使う」「生物について使う」の3種の要素の組み合わせとなる。

被修飾部制限については、「食べる概念の動詞について使う」「儲ける・貯める概念の動詞について使う」の2種が存在する。[5]

以上、数量〈多〉カテゴリーについて見てきた。次に数量〈少〉カテゴリーについて見てゆく。

まず、「チョビット」についてである。当集落でしばしば使われる「チョット」を基準にすると、「チョビット」のほうが少ない感じがするという教示があった。

● ┌チョッ┐トト　チョ┌ビッ┐ト、チョ┌ビッ┐トノホーガ　ス┌クナ┐イ　カンジ。(ちょっととちょびっとは、ちょびっとの方が少ない感じ。)

●チョ┌ビッ┐トノ　┌ホ┐ーガ　┌ナ┐ー　カンジガ　スル┌カ┐モ　ワカラン　┌ネ┐。(｛「チョット」より｝「チョビット」のほうがない感じがするかもしれないね。)

●ホ┌ンノ　チョッ┐ト。(ほんのちょっと｛のこと｝。)

一方で、「チョット」と「チョビット」に差を見いだしていない教示者もある。

●チョ┌ビッ┐トデ　┌ス┐ベテ　マ┌カナ┐ウンジャ　┌ナ┐イ　カ┌ネ┐。(「チョビット」｛という語で｝全部まかなうのではないかね。)

しかし、ここでは「チョット」との差があるものとして考えておく。

【分類枠1】「チョット」より少量を表す

同様の語には「チョボット」「チョッピリ」などがある。

一方、基本的に少量を表すものの、量に曖昧さがある語として「タショー」がある。

○ナン ┌ボカ┐ワ　┌ア┐ル　カ┌ネ┐。タ┌ショー┐　アル　カ┌ネ┐。(いくらかはあるかね。{それを} 多少あるかね。)

○サ┌ガシテミ┐リャー　タ┌ショー┐　アルカモ　シレン　ガ┌ネ┐ー。(探してみれば多少あるかも知れないがね。)

いくらかはある、という意味で使われる。すなわち、量が不確定である。

●コッ┌チガ　ソーゾーシタヨ┐リ　オ┌イ┐ー　コ┌ト┐ガ　┌ア┐ル　ワイネ。(こっちが想像したより多いことがあるよ。)

●┌ヨ┐ケーノト　┌チート┐ノト　サ┌ガクガアッ┐テモ　┌エ┐ー　ワイ。(たくさんと少しと差があってもよいよ。)

●オ┌イ┐ー　ス┌クナ┐イノ　ア┌イダ┐。(多いと少ないの間。)

しかし、基本は少ないことにある。なぜなら、「タショーナラ」のように、「ナラ」を接続させることができるからである。

●┌アンタカタ┐ニ　┌ドー。タ┌ショーナ┐ラ　┌ア┐ル　┌ヨ┐。(あなたのところにどう {と言われて}。多少ならあるよ。)

また、想像したのより多いことがあるという教示からも、少ないつもりでこの語を使うことがわかる。基本的には少ないことであるが、そこには量の曖昧性があると考えられる。

【分類枠2】曖昧な数量を表す

また、数量〈多〉カテゴリー同様、対象に制限がある語もいくつか見られた。

このような手順を経て、両地点で得られた分類枠は次のようなものであった。

☆数量〈多〉のカテゴリー

1　限界性を前提としない。(限界がない多量)

2　「エット」よりも多い量をあらわす。
対象・枝修飾部に制限がある。

3　「飲食」の意味を持つ動詞しか修飾しない。

4　「保有／取得」の意味を持つ動詞しか修飾しない
対象に制限がある。

5　対象が気体・液体物の場合に使えない。

6　対象が生物の場合に使えない。

7　対象が固体物の場合に使えない。

☆数量〈少〉のカテゴリー

1　曖昧な数量をあらわす。

2　「チート」よりも少ない量を表す。
対象に制限がある。

3　対象が生物の場合に使えない。

4　対象が固体物の場合に使えない。

5　対象が気体・液体の場合に使えない。

6　対象は蜜柑のみ。

この分類枠は、大長、加計とも共通である。しかし、これらの枠相互の関係を考えた場合、数量〈多〉の場合、1と2の分類枠と3から7までの分類枠にはその性質に異なりがある。

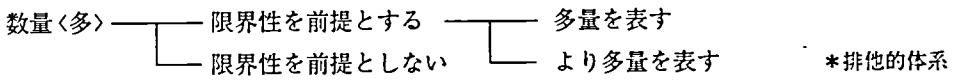
1の「限界性を前提としない」という枠に対して、「限界性を前提とする」という枠が考えられる。同様に、「『エット』よりも多い量を表す」という枠に対して、「『エット』と同様の多量を表す」という枠が想定される。そして、それぞれ2つの枠は互いに相補的であり、同時に両方の枠を満たすと

いうことは考えられないし、例えば「限界性を前提とする」「限界性を前提としない」の両者はどちらが上位であるということもない。

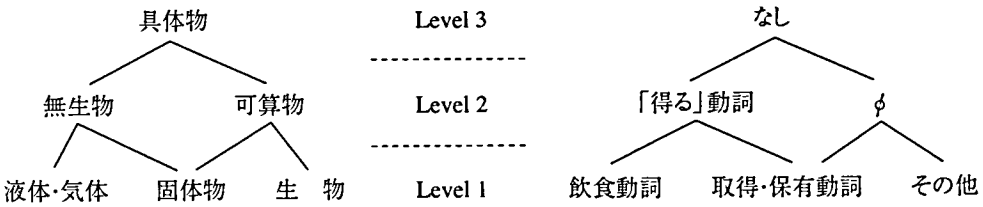
しかし、例えば5から7までの枠では、このうち2つの枠を同時に満たす語が存在する場合も想定される。また、5から7の分類枠をいずれも満たさない語は、これらの分類枠を一つでも満たす語よりも上位にあるという関係にある。この場合、後者の方が抽象度が高く、後者が上位、前者が下位の関係になる。分類枠1、2によって描かれる体系を「排他的体系（Exclusive system)」、分類枠3から7から描かれる体系を「包括的体系（Inclusive system)」[6]と呼ぶ。

排他的体系は樹形図で示され、そこに差し向けられる対象物制限、対象物・被修飾部制限は包括的体系と呼べるものである。この包括的体系のベースとなっているのは、対象物と被修飾部の関係においてどういう場合に使われるか（具体性の有無）ということである。それに対し、排他的体系は数量の捉え方に関わる。数量〈少〉に関しても同様である。

そしてそれぞれの枝に対して、対象物制限、[7]被修飾部制限という分類枠が差し向けられる。



☆対象物制限　　☆被修飾部制限

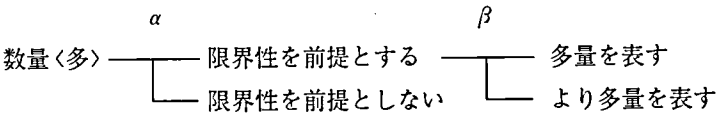


4　個人性と社会性の出現状況

先に示した手順を経て得られた結果について概観する。考察にあたっては、排他的体系と包括的体系を別に扱うことにする。なお、語の所有の有無に関しての分析は今回は行わない。

4．1　排他的体系の場合

4．1．1　数量〈多〉の排他的体系



体系図のα、βは体系の段階を示す。排他的体系ではその関係は樹形図で表示されるが、それぞれの枝の分岐をα段階、β段階と呼ぶことにしたい。以下には、段階別に個人差の出現状況を観察する。教示者によって回答の割れた語は文字を囲んで表示した。

α段階

- 限界性を前提とする　エット 10／10　ヨーケ 7／7　ヨッケ 1／1　ヨケー 8／8　ギョーサン 7／7　ジョーサン 2／2　ヨーサン 1／1　タクサン 10／10　タラフク 9／9　フトイコト 1／1　イッパイ 9／9　イッパー 1／1　シコタマ 8／8　タイソー 9／9　ウント 9／9　バクダイ 10／10　タップリ 10／10　ヤマホド 10／10　ドッサリ 9／9　ジョーニ 2／2
- 限界性を前提としない　ナンボデモ 10／10　イクラデモ 10／10

ここに文字囲いされた語はない。したがって、意味上の個人差は全くないということである。

β段階

- 多量を表す　エット 10／10　ヨーケ 7／7　ヨッケ 1／1　ヨケー 8／8　[ギョーサン 2／7]　[ジョーサン 1／2]　ヨーサン 1／1　タクサン 10／10　タラフク 9／9　イッパイ 9／9　イッパー 1／1　シコタマ 8／8　タイソー 9／9　ウント 9／9　[バクダイ 1／10]　タップリ 10／10　ヤマホド 10／10　ドッサリ 9／9　フトイコト 1／1　ジョーニ 2／2
- より多量を表す　[バクダイ 9／10]　[ギョーサン 5／7]　[ジョーサン 1／2]

先に示したα段階では個人差が全くなかったことを考えると、β段階で個人差が生じるという現象は非常に特徴的である。さらに、ここでは個人別のデータは示していないが、教示者F5氏はより多量を表すという分類枠そのものを所有していなかった。個人差が非常に大きいことがわかる。以下は、加計のデータである。ここでも、β段階において個人差が集中的に出現する。

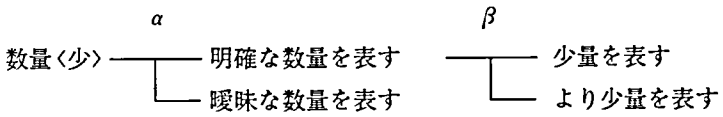
α段階

- 限界性を前提とする　エット 10／10　ヨーケ 1／1　ヨケー 10／10　ギョーサン 9／9　タラフク 9／9　タクサン 10／10　イッパイ 10／10　シコタマ 8／8　タイソー 7／7　ウント 9／9　バクダイ 8／8　タップリ 10／10　ヤマホド 10／10　ドッサリ 10／10　フトイコト 1／1　ジョーニ 3／3　タンマリ 2／2
- 限界性を前提としない　ナンボデモ 10／10　イクラデモ 10／10

β段階

- 多量を表す　エット 10／10　ヨーケ 1／1　ヨケー 10／10　[ギョーサン 4／9]　タラフク 9／9　タクサン 10／10　[イッパイ 9／10]　シコタマ 8／8　タイソー 7／7　ウント 9／99　[バクダイ 4／8]　タップリ 10／10　ヤマホド 10／10　ドッサリ 10／10　ジョーニ 3／3　タンマリ 2／2
- より多量を表す　[バクダイ 4／8]　[ギョーサン 5／9]　[イッパイ 1／10]　フトイコト 1／1

4．1．2　数量〈少〉の排他的体系



α段階

- 明確な数量を表す　チョット 10／10　チョート 10／10　スコシ 10／10　スコーシ 1／1　チョビット 9／9　チョボット 6／6　チビット 3／3　メクソシカ 1／1　メクソホド 9／9　ハナクソホド 3／3　ワズカ 10／10　ショーショー 10／10　チョッポシ 1／1　チョッピリ 7／7　チョンビリ 1／1　チックリ 1／1　チッピリ 1／1　ドロツキホド 10／10
- 暖昧な数量を表す　タショー 10／10

数量〈多〉カテゴリーと同様、α段階では個人による個人差はない。

β段階

- 少量を表す　チョット 10／10　チョート 10／10　スコシ 10／10　スコーシ 1／1　[チビット 1／3]　ワズカ 10／10　ショーショー 10／10　チョッポシ 1／1　チックリ 1／1　ドロツキホド10／10
- より少量を表す　チョッピリ 7／7　チョンビリ 1／1　チョッピリ 7／7　チョンビリ 1／1　チッピリ 1／1　チョビット 9／9　チョボット 6／6　[チビット 2／3]　メクソシカ 1／1　メクソホド 9／9　ハナクソホド 3／3

ここでは個人差のある語は1語「チビット」である。数量〈多〉の時と違い、個人差はあまりない。ただ、数量〈多〉も〈少〉もα段階には個人差がなく、β段階において個人差が出現するという共通点は存在する。以下は加計のデータである。ここでも大長と同様の結果が出ていることが確認できよう。

α段階

- 明確な数量を表す　チョット 10／10　チット 1／1　チョート 10／10　スコシ 10／10　チョビット 10／10　チョボット 2／2　チビット 8／8　メクソシカ 1／1　メクソホド 5／5　ハナクソホド 3／3　ワズカ 10／10　ショーショー 10／10　チョッピリ 8／8　チョンビリ 2／2　チョンボシ 4／4　チョンボリ 1／1
- 曖昧な数量を表す　タショー 10／10

β段階

- 少量を表す　チョット 10／10　チート 10／10　スコシ 10／10　チョビット 2／10　チョンボシ 4／4　チョボット 2／2　チビット 3／8　ワズカ 9／10　ショーショー 10／10　チョッピリ 8／8
- より少量を表す　チョッピリ 4／8　チョビット 8／10　チョボット 2／2　チビット 5／8　チット 1／1　チョンビリ 2／2　ワズカ 1／10　チョンボリ 1／1　メクソホド 5／5　ハナクソホド 3／3　メクソシカ 1／1

4．2　包括的体系の場合

4．2．1　数量〈多〉の包括的体系

大長、加計ともに、数量〈多〉カテゴリーの包括的体系は「被修飾部の制限」と「対象物の制限」の2つの分類枠によって規定された。以下、分類枠ごとに、その個人差の出現を観察し、社会性がどのように存在しているのか、また、反対に、個人性がどのように存在するのかということについて、その法則性を考えてゆく。

タラフク

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
飲食	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
取得	○			○		○					3/10

シコタマ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
飲食			○				○		NR	NR	2/8
取得	○	○		○	○	○	○	○	NR	NR	7/8

4．2．1．1　被修飾部の制限

まず、数量〈多〉のカテゴリーで被修飾部に制限があるという回答が1名以上あった語は「シコタマ」「タラフク」の2語であった。そしてこれは両地点に共通である。

左に図示したものは大長の結果であるが、これを見ると、被修飾部について2語の機能分担を相補的に行ってるのはM2、M5、F3の3氏であることがわかる。一方、M1氏とM4氏は「タラフク」が「シコタマ」をカバーするパターン、M3氏のように2語が同じであるパターン、そしてM1、M4氏とは逆のF2氏のパターンの、4種のパターンがみられる。しかし、「タラフク」はすべての教示者が「飲食について使う」ということを回答している。同様に、M3氏のみ例外ではあるものの、「シコタマ」は「取得、保有について使う」という回答があった。すなわち、個人ごとに回答内容には差があるものの、必ず社会的に共通する部分が存在するということが指摘できる。なお、飲食、取得（取得・保有）の両方に○印があっても、それ以外の動詞（例えば「ある」「歩く」など）の場合は言わないことは確認済みである。

右に加計の結果を示した。ここでも、大長で成立していたことが成り立っている。すなわち、「タラフク」の場合には飲食動詞を被修飾部にとり、「シコタマ」の場合は取得・保有動詞を被修飾部にとるということには個人差はない。大長、加計とも、同じ傾向にあることが指摘できよう。

タラフク

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
飲食	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
取得			○								1/10

シコタマ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
飲食			○		○		○	○		○	5/10
取得	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10

4. 2. 1. 2　対象物制限

タップリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物			○				○		○	○	4/10
生　物											0/10

ヤマホド

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物											0/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物		○	○	○			○	○	○	○	7/10

ドッサリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物											0/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10

バクダイ

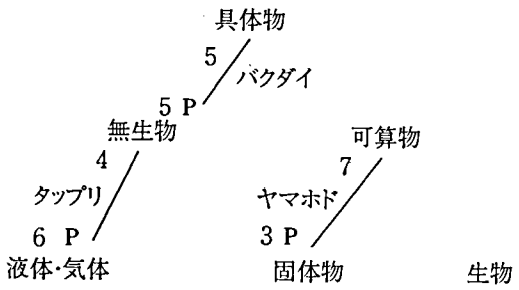
	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物		○		○				○	○	○	5/10

大長で対象物に制限があるとされた語は、「ドッサリ」「ヤマホド」「タップリ」「バクダイ」の4語であった。うち、制限内容に個人差がない語は「ドッサリ」1語だけであった。なお、表で示さなかった語は、対象物の制限がないという回答がすべての教示者から得られたものである。

対象物に制限のある4語のうち、「ドッサリ」以外の語には個人差が見られる。しかし、全員の回答が一致する枠が必ず見られる。例えば「タップリ」の場合、それを液体・気体について使うという回答は100%一致し、それを生物について使わないということも100%一致する。個人差が出現するのはそれを固体物について使うかどうかという点である。同様に「ヤマホド」の場合は、固体物について使うという点は100%一致し、液体について使わないということも100%一致する。個人差が出現するのは、生物について使うかどうかという点である。「バクダイ」は液体・気体についてと固体物については全員が使うという結果で、生物に使うかという点だけに個人差があらわれている。

そして「タップリ」の場合、6名は液体・気体のみと回答し、残りの4名は気・液体と固体物両方に使うと回答した。気・液体と固体物を抽象化すると、併せて無生物という抽象枠が設定できる。「タップリ」を固体物、気・液体の両方に使うと回答した教示者は、無生物という枠で対象物に制限を持っていると考える。同様に「ヤマホド」は10名のうち7名が生物についても使うと回答しており、これを抽象化すると7名は可算物について使うということになる。

さらに「バクダイ」の場合は、すべての教示者が固体物と液体・気体について使うと回答した。したがって、無生物という抽象枠がそのまま基本レベルに設定され、そこから生物をも含むかどう



＊数字は回答者数、Pはプロトタイプ枠

位のレベルにまで拡張していると考える。ただし、ここでいう1段階とは、最下位としてしめした「液体」「固体」などから2つをペアにして抽象化した段階を示すだけであり、何らかの語彙表（例えば分類語彙表など）での段階を示しているわけではない。「ヤマホド」も同様の結果である。すなわち、社会性の高い部分から1段階抽象化できる部分までに個人差の出現はとどまっているといえる。大きな意味で、その範囲の中で社会性が保証されているのである。

一方、加計の場合は、対象物に制限がある6語のうち2語が大長とは異なる結果となった。右に示した表が加計の結果である。表の見方は大長と同じである。これによると「ウント」と「ドッサリ」の2語のみ、2つの枠に個人差が出現する。他と同様、10名回答のプロトタイプ枠[8]は存在するのであるが、例えば「ウント」の場合、固体物と液・気体物、固体物と生物の組み合わせ、または制限なしという形で回答が割れている。ただし、このような例は2語だけであり、現段階では例外と考えられる。

かということで個人差が生じる。これを左に図示した。

これを見ると、個人差のみられる語はすべて、10名回答の枠（Pと表示した、プロトタイプ枠）から1段階上位の部分との間で出現することがわかる。例えば、最下位のレベルにある気・液体を中心とする「タップリ」は4名が固体物にも使えると答えたことによって、この4名は「タップリ」の対象物を無生物であると考えていると抽象化でき、結果的に1段階上

タップリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物		○	○		○	○	○	○	○	○	8/10
生　物											0/10

ウント

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物		○	○	○	NR	○			○	○	6/9
固体物	○	○	○	○	NR	○	○	○	○	○	9/9
生　物		○	○	○	NR		○	○	○	○	7/9

ドッサリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物				○	○		○	○	○	○	6/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物				○	○						2/10

ヤマホド

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○										1/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10

ジョーニ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	NR	NR		○	NR	NR	NR	NR	○	NR	3/3
固体物	NR	NR	○	○	NR	NR	NR	NR	○	NR	3/3
生　物	NR	NR	○	○	NR	NR	NR	NR	○	NR	3/3

タイソー

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	NR	NR	○	○	○	NR			○	○	5/7
固体物	NR	NR	○	○	○	NR	○	○	○	○	7/7
生　物	NR	NR	○	○	○	NR	○	○	○	○	7/7

4. 2. 2　数量〈少〉の包括的体系

メクソホド

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	NR		○	○	○		○	○	○	7/9
固体物	○	NR	○	○	○	○	○	○	○	○	9/9
生　物		NR									0/9

ショーショー

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物	○				○	○			○	○	5/10

チックリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生物	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9/10

チッピリ

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生　物	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9/10

左に示した表は、数量〈少〉の包括的体系のうち、1名でも対象物に制限があると答えた語を示したものである。ここでも、先の数量〈多〉で指摘したことが成立している。すなわち、いずれの語の場合も、個人によって差が見られるのは1つの枠だけである。　例えば「メクソホド」の場合、個人差が生じるのは液体・気体物の枠であり、「ショーショー」「チックリ」「チッピリ」の場合は生物の項が個人差を見せる。

なお、この他の対象物制限のある語には「メクソシカ」「ドロツキホド」の2語がある。「メクソシカ」は生物には使用できないと答え、「ドロツキホド」は蜜柑のみに使うという回答があった。この2語は、制限内容に関しての個人差はない。しかし、「メクソシカ」は大長の場合も加計の場合も所有者数が1であるため、個人差は生じない。一方、「ドロツキホド」は大長のみに見られ、回答者数10である語であるが、「ドロツキ」という語は蜜柑の木の下の方の枝を意味している。

○ ┌アヿ ンタカタノ　ド ┌ロヿ ツキホド　ヨ。　（あなたのところの泥つきほどだよ。）

蜜柑は木の下部には実が付きにくい。これを捉え、蜜柑の収穫量が少ないことを「ドロツキホド」と言ったのである。「ドロツキ」が蜜柑の木の下枝を指すという意識が働く限り、蜜柑の量以外の場合に使うことは想起しにくいであろう。これが個人差の現れなかった理由であると考える。

以上、大長の場合、数量〈少〉のカテゴリー内部においても対象物制限の内容について個人差が見られ、その出現には、数量〈多〉カテゴリーの場合と同じように一定の法則がみられることを指摘した。

一方、加計の場合は大長と異なる結果が出た。加計では「ショーショー」「メクソホド」「メクソシカ」に制限が見られた。ただ、

ショーショー

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物		○	○	○	○	○	○	○	○	○	9/10
固体物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10/10
生物									○	○	2/10

メクソホド・メクソシカ　　●は「メクソシカ」

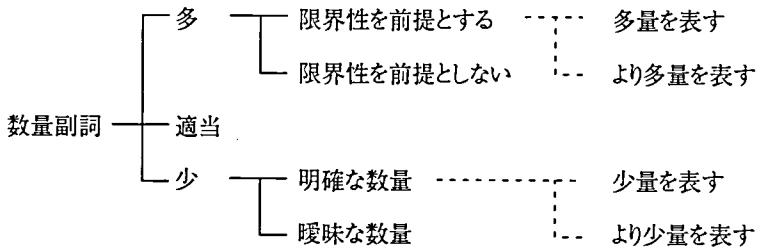
	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	●	NR	○	NR	NR	○				NR	3/6
固体物	●	NR	○	NR	NR	○	○	○	○	NR	6/6
生物	●	NR	○	NR	NR	○	○		○	NR	5/6

ハナクソホド

	M1	M2	M3	M4	M5	F1	F2	F3	F4	F5	
気・液体物	NR	NR	NR	NR	NR	NR				NR	0/3
固体物	NR	NR	NR	NR	NR	NR	○	○	○	NR	3/3
生物	NR	NR	NR	NR	NR	NR	○		○	NR	2/3

先にも示したとおり、「メクソホド」は回答者数1であり、個人差はない。しかし「ハナクソホド」は大長と同じように1つの枠だけに個人差が出現するが、「ショーショー」「メクソホド」の2語は個人差のある枠は1つの枠にとどまらない。数量〈多〉カテゴリーにおいても加計では個人差が2つの枠に起こる語があった。そのような個人差を引き起こす人数は少ないとはいえ、加計の方が個人差が大きい傾向にあると言えよう。

5 まとめ



この体系において個人差が見られたのは点線の部分である。

①基本的に排他的体系は個人差が出現しにくい。(社会性が高い)

②個人差は体系下位に出やすく（体系下位において個人性は高くなりがちである)、その枠は発話文によって常には捉えられないような枠である。

一方、包括的体系は個人差の出現しやすい体系である。

①個人差は確かに認められる。その個人差は、それが見られる人数の比をみると排他的体系に比べ確定的である。数量〈多〉〈少〉のカテゴリーにおいて、対象物制限がある語、被修飾部制限がある語を見ると、その回答内容に個人差のある語が必ず存在する。これは排他的体系とは異なる結果である。

②しかし、このように個人差が存在するものの、すべての教示者が共通の回答を行う枠（プロトタイプ枠）は必ず1つ以上存在する。そして、個人差はその隣接枠に起こる。

③そして、すべての教示者が共有する枠とそうではなく個人差を見せる制限内容の関係をみると、具体から抽象へと一段階上の範囲に個人差が出現しているということがわかる。個人差があるのは1つの枠だけである。どの教示者も共通して所有している制限から、その制限がなくなるように、より意味が抽象的になるような個人差が出現している。

これらの傾向は、安芸方言2地点に共通してみられたものであるが、加計の場合、包括的体系のまとめ③が成立しない場合もあった。このことから、加計の方が個人差が大きいと言えるが、例も少なく、微差である可能性を捨てきれない。差が有意味なものであるのか、そして加計の個人差が大きい場合の要因の解析については、今後の課題としたい。多くの地点について同様の調査研究をする中で明らかにしてゆくこととなろう。

主要参考文献

井上博文　1991　「方言類義語の世代差についての一考察
－熊本県方言に於ける〈数量の多〉を表す数量関係の副詞語彙を中心に－」『国文学攷』第130号

岩城裕之　1998　『方言語彙の個人性と社会性』　広島大学修士論文　未刊
柴田　武　1988　『語彙論の方法』　三省堂
野林正路　1996　『認識言語と意味の領野　－構成意味論・語彙論の理論と方法－』　名著出版
藤原与一　1988　『瀬戸内海方言辞典』　東京堂出版
室山敏昭　1976　『方言副詞語彙の基礎的研究』　たたら書房
森田良行　1977　『基礎日本語　角川小辞典＝7』　角川書店
　同　　1980　『基礎日本語　角川小辞典＝8』　角川書店
広島大学内海文化研究室　1976　「瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究」
『内海文化研究紀要　第4号』　広島大学内海文化研究室

本論文は、平成10年度国語学会秋期大会（九州大学）で口頭発表したものである。席上、あるいはその後、多くの方から質問や御教示を賜った。記して御礼申しあげる。また、この論をなすにあたって、多くの教示者の方にお世話になった。この方々なしには本論が成り立たなかったことを記して、お礼申しあげる。

注

(1) 本論文では個人差の存在をとらえ、その出現モデルを構築することにある。したがって、体系も個人差を含んだ形で描くことになる。したがって、例えば「タップリ」という語の場合、しばしば容器性があることが指摘されるが、教示者によっては「車がタップリ停まっている」が適文となる場合もある。この教示者の存在を考えると、「タップリ」を「容器性あり」という分類枠で記述することはできない。したがって対象物制限といったレベルで、いわば資料を裸の形で分類しただけで出すことになる。個人差を考えた場合の体系は、このような形にならざるを得ないであろう。

(2) 人口は約2000人（平成二年）。10名という教示者の数は調査の煩雑さからこの程度が実際的な人数であるが、統計的処理を施す場合には人数を増やさなくてはならない。

(3) 人口は約2500人（平成九年）。大長は島嶼部、加計は山間部であるが、いずれも同程度の人口をもち、地域の中心地である。高等学校、地方銀行の支店、交通の要衝（乗り換え地）などの条件を満たす。

(4) 広島大学内海文化研究室（1976）、室山（1976）など。

(5) 注（1）参照。

(6)「排他的体系」「包括的体系」ともに発表者の術語。

(7) ここで示した「液体・気体」「固体物」「生物」は、同レベルに並ぶ概念ではないが、暫定的に同じレベルで示した。「液体・気体」「固体」は性質による分類であり、両者をあわせれば「生物」に対して生物か無生物かという上位の分類となる。「生物」「固体物」を合わせると「液体・気体」に対して可算物か非可算物かという上位の分類を想定できる。しかし、これらを同時に示すことができないため、ここでは暫定的に同レベルに３つを並べた。

また、対象物については、『分類語彙表』最下位レベルから１語ずつ抜き出し、気体、液体、固体、生物に分類していったもので調査した。なお、文脈で性質が変わると予想されるものはそれぞれ処理した。例えば「魚がたくさん泳いでいる」と「魚をたくさん買ってきた」の場合、前者は生物に、後者は固体物として処理した。

(8) ここでの「プロトタイプ」は「教示者全員が回答した」という意味で用いた。